潮 流

道半ばの大手邦銀の収益力回復

主席研究員 鈴木博

2004 年３月期の大手銀行の決算では、不良債権処理損失や株式償却の増加等によって大幅赤字となった前期に比べて、大半の銀行で最終損益が黒字に転化した。また、全体として不良債権比率の低下や自己資本に占める繰延税金資産計上額の減少などバランスシートの改善も進んだ。このように銀行の収益力や財務内容はようやくトンネルを脱した感があるが、最終損益が黒字に転化した銀行では、不良債権処理額の減少や株価上昇の効果が大きく、本業の収益力を示す業務純益（一般貸倒引当金繰入前）は減少したところが多い。

本業の収益が伸びなかったのは、投資信託や保険商品の窓販増加等によって役務取引等利益は増加したものの、柱となる資金利益が減少したことによるものである。資金利益の減少は貸出残高の減少とともに、利鞘の改善があまり進んでいないことに起因している。

大手 7 金融グループ（都銀・信託を中心とする金融グループ、新生銀行とあおぞら銀行は除く）についてみると、2004 年 3 月期は、全体で預金が前期比 8 兆円増加したが、総資産の過半を占める貸出金が 14 兆円減少し、国債を中心とする有価証券の増加（21 兆円）でこれらを埋め合わせた形となった。利鞘については、単体 11 行（国内業務）ベースで、預貸金利鞘が拡大したのが 4 行で縮小したのが 7 行である。有価証券も含めた総資金利鞘では、5 行が拡大し 5 行が縮小（横這いが 1 行）となるなど、全体として改善ペースは鈍い。

邦銀の貸出利鞘は、欧米の銀行に比べて小さいことが以前から指摘されており、各行ともこれまで利鞘の拡大に取り組んできた。内部格付制度に基づく貸出先の格付に応じた貸出金利の適用や、利鞘の大きい中小企業向け貸出や個人向け住宅ローン貸出の増加などを推進してきた。中小企業向け貸出については、スコアリングモデルなどの新たな審査手法のもとで、無担保・第三者保証不要の小口ローンの貸出などを推進している。住宅ローンについては、2004 年 3 月期に 7 グループ全体で貸出残高が前期比 4 兆円近く増加している。また、メガバンクでは、大手消費者金融会社との資本提携を進め、これらの会社が保有している消費者信用分野での審査ノウハウ等を活用しようとする動きなどもでている。

景気回復を背景に設備投資が増加傾向となり、企業のリストラも進んで銀行の不良債権処理額もピークアウトしてきていることなどから、既往貸出金の減少にも歯止めがかかってこよう。これに加えて、中小企業向けローンや個人向けローンなどが伸びていけば、大手行の貸出金が増加に転じる時期もそう遠くはないと思われる。

金利上昇による保有債券の価格下落リスクはあるが、前記のような貸出内容の改善やリストラの進展等によって大手行の収益力は今後次第に強化されてこよう。収益力が増してくると、既存事業の強化や新たなビジネスチャンスの開拓などを行う余地が広がる。90 年代以降金融のグローバル化が進展するなかで、円の国際化や東京金融資本市場の地位向上などが叫ばれたものの、日本の金融市場や金融業は停滞を余儀なくされてきた。それは、市場拡大の尖兵となるべき金融機関が不良債権処理などに追われて、前向きな事業展開に取り組むことが十分にできなかったことに一因がある。大手行の収益力回復を契機に、日本の金融資本市場が再び輝きを取り戻すことが望まれる。